

平成26年度八重山群島病虫害発生予報第1号(4月予報)

I 4月の気象予報

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	20	20	50
平年並	40	30	30
低い(少ない)	40	50	20

(平成26年3月13日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
八重山群島(石垣島)	23.3	25.8	21.2	155.1	125.3

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 4月の発生予報および防除上の注意事項

1 水稻(一期作)

- スクミリンゴガイの防除対策
 - a 3月中旬の調査の結果、1m²あたりの貝数は0.1頭(前年0.1頭、平年0.2頭)と平年並であったが、発生は一部水田に限られた。
 - b 本種の被害は移植直後～2週間頃に集中する。
 - c 貝および卵塊は見つけ次第捕殺する。なお捕獲するときにはゴム手袋を着用する。
 - d 取水口に金網(5mm以下)を設置し、用排水路からの侵入を防ぐ。
 - e 移植後2～3週間は浅水管理(1cm以下)に努める。
 - f 畦畔および用排水路周辺の雑草を除去し、産卵場所をつくらない。

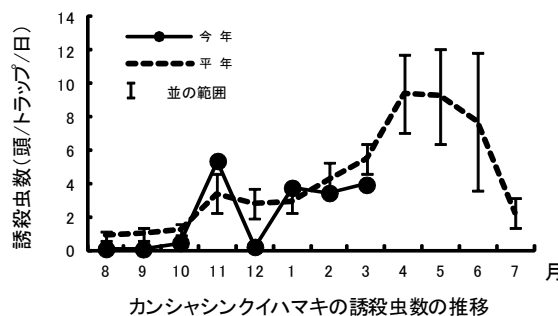
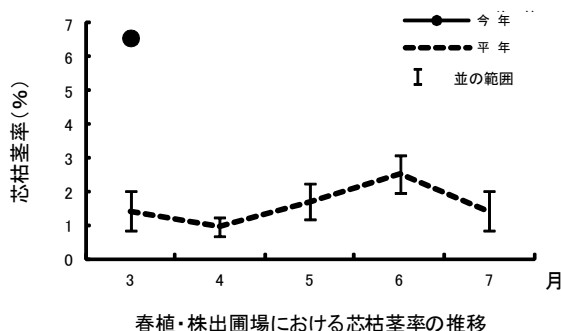
2 さとうきび

(1) カンシャシクイハマキ

発生程度 : 多

予報の根拠

- 3月中旬の調査の結果、春植・株出圃場における芯枯茎率は6.6%(前年2.5%、平年1.4%)と平年より高かった。
- 3月のカンシャシクイハマキ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は3.9頭(前年2.2頭、平年5.5頭)と平年よりやや少なかった。
- 芯枯茎切開調査の結果、確認されたメイチュウ類幼虫のうち48.2%がカンシャシクイハマキであった。



<防除上注意すべき事項>

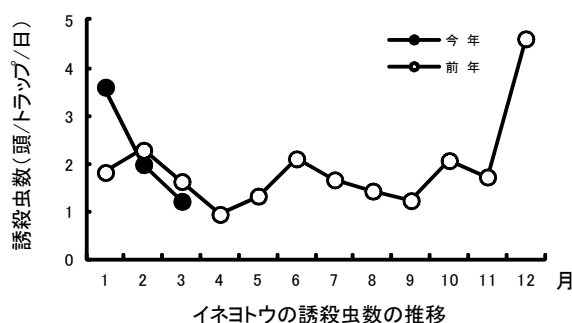
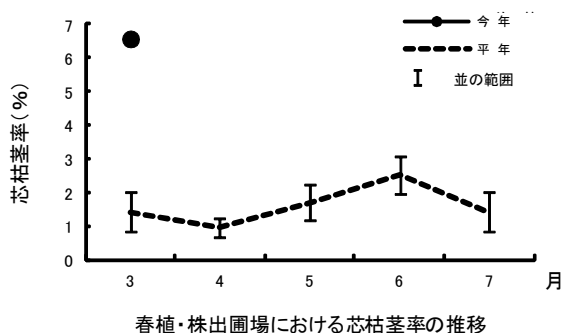
- ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、植付時・株出管理時および生育初期の防除を徹底する。
- 圃場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- 植付時および株出管理時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を施用する。
- 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- 平成24年度病害虫発生予察技術情報第3号(平成24年6月11日付)参照。

(2) イネヨトウ

発生程度 : 多

予報の根拠

- 3月中旬の調査の結果、春植・株出圃場における芯枯茎率は6.6%(前年2.5%、平年1.4%)と平年より高かった。
- 3月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は1.2(前年1.6頭)であった。
- 芯枯茎切開調査の結果、確認されたメイチュウ類幼虫のうち51.8%がイネヨトウであった。



<防除上注意すべき事項>

- カンシャシクイハマキの防除上注意すべき事項を参照。
- 平成25年度病害虫発生予報第6号(平成25年8月30日付)号コラム参照。

- サキシマカンシャクシコメツキ(ハリガネムシ)の防除対策
 - a 3月の合成性フェロモントラップ調査によるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は3.8頭(前年2.8頭、
 平年4.2頭)と平年並であった。
 - b 更新圃場は速やかに古株などの残渣を処理し、植え付けまでに数回耕耘して幼虫密度の
 低減を図る。
 - c 培土時に他の土壌害虫の防除も兼ねた薬剤を選定し施用する。
- カンシャコバナネガカメムシ(ガイダー)の防除対策
 - a 3月中旬の調査の結果、茎当たり虫数は2.7頭(前年3.3頭、平年27.3頭)と平年よりやや少なかつた。
 - b 2～3月の気温に基づき、3月19日時点で防除適期は、平年より石垣島及び周辺離島で6日、
 与那国島で8日程度遅いと予想される。
 - c この時期に茎当たり虫数が20頭を超える地域は一斉防除をすることが望ましい。
 - d 薬剤防除の際は周辺住宅地や隣接圃場に薬剤が飛散しないよう風向きに注意する。

防除適期予想日(3月24日現在)

地域別	防 除 適 期	2.5齡期予想日		
		本年	平年	平年差
石垣島及び周辺離島	4月3日～4月17日	4月10日	4月8日	2日遅い
与那国島	4月7日～4月21日	4月14日	4月10日	4日遅い

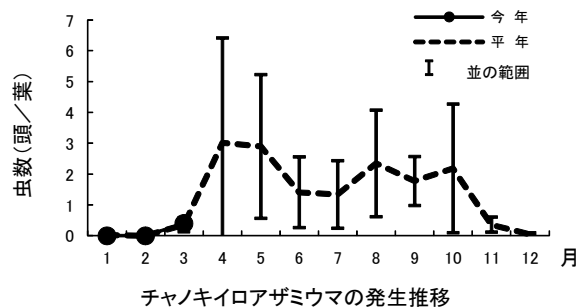
3 マンゴー

(1) チャノキイロアザミウマ

発生程度 : 並

予報の根拠

3月中旬の調査の結果、葉当たり虫数は0.4頭(前年0.1頭未満、平年0.4頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a 混合花の新葉や不用な新梢は本種の発生を助長するので、早い時期に摘葉する。
- b 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
- c 薬剤防除を行う際は、受粉昆虫に影響のないよう巣箱等を圃場外に移動する。

○ 炭疽病の防除対策

- a 3月中旬の調査の結果、一部施設で発生していた。
- b 本病の病原菌は花芽、花序、葉などにすでに潜在感染していることが知られており、収穫果
 実への被害軽減のため、今後袋掛け前までの防除対策が重要である。
- c 罹病した新梢、残渣は、速やかに施設外に持ち出し処分する。
- d 結実期には治癒効果のある薬剤を選定し、定期防除に努める。
- e 平成26年度病害虫発生予報第1号(平成26年3月24日付)号コラム参照。

- ハダニ類の防除対策
 - a 3月中旬の調査の結果、葉当たり虫数は0.1頭未満(前年0頭、平年0.1頭未満)と平年並であったが、発生は一部施設に限られた。
 - b 発生が確認されたのは、新葉および古葉どちらにも寄生するシュレイツメハダニであった。
 - c 今後気温の上昇に伴い増加する可能性がある。
 - d 多発すると果実も被害を受けるので、早期防除に努める。

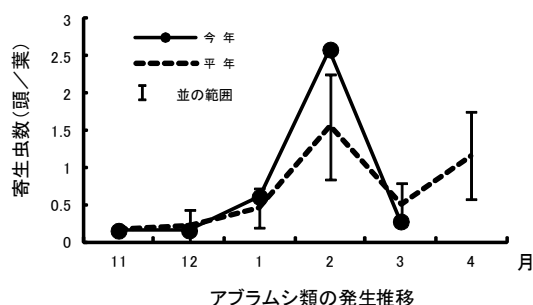
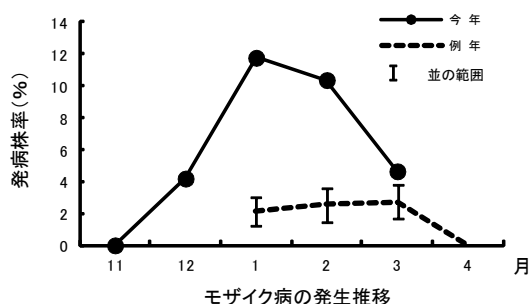
4 かぼちや

(1) モザイク病

発生程度 : やや多

予報の根拠

3月中旬の調査の結果、発病株率は4.7%(前年4.6%、例年2.7%)と例年よりやや高かった。



<防除上注意すべき事項>

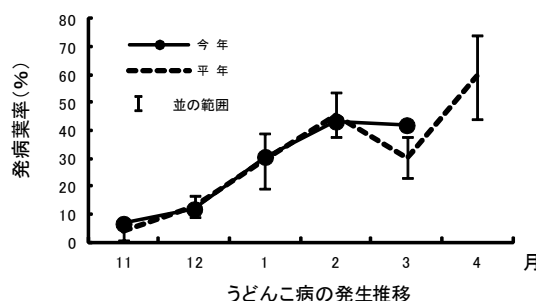
- a 媒介虫であるアブラムシ類の葉当たり虫数は0.28頭(前年0.37頭、平年0.51頭)と平年並であったが、有翅虫が多く観察された。
- b 圃場周辺に防風対策を兼ねた防虫ネット等の資材を利用して有翅虫の飛来侵入を防ぐ。
- c 圃場周辺の雑草はアブラムシ類の発生源になるので除去する。
- d 発病株は発生源となるので、みつけ次第抜き取りビニール袋に入れるなどして密閉処理し、圃場外へ持ち出し処分する。
- e 本病は汁液伝染するので、ハサミや手の消毒、洗浄を行う。
- f 収穫後の残渣は発生源となるので速やかに片付ける。

(2) うどんこ病

発生程度 : やや多

予報の根拠

3月中旬の調査の結果、発病葉率は42.0%(前年31.0%、平年30.1%)と平年よりやや高かった。



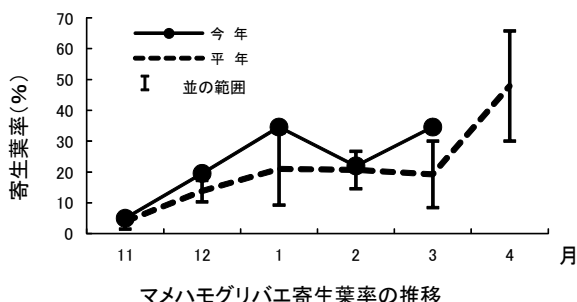
<防除上注意すべき事項>

- a 発生源となる株元の不要な老葉・下葉を除去し、透光通風をよくする。
- b 着果期以降、草勢の低下に伴い被害が急激に広がる場合があるので防除を徹底する。

5 さやいんげん(施設)

- (1) ハモグリバエ類
発生程度 : やや多
予報の根拠

3月上旬の調査の結果、寄生葉率は36.0%(前年17.0%、平年19.3%)と平年よりやや高かった。



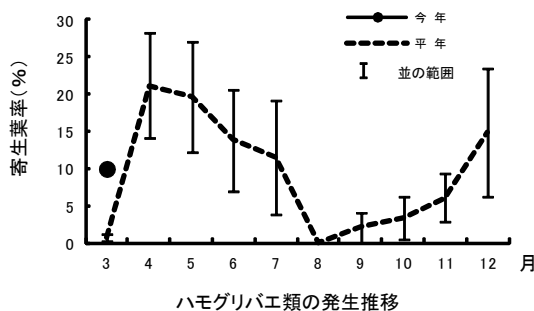
<防除上注意すべき事項>

- 摘葉等による残渣は成虫の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして、圃場外に持ち出し処分する。
- 本種は薬剤抵抗性が発達し、また野外に多数の在来天敵が存在することから、天敵に影響の少ない選択性殺虫剤を使用する。

6 オクラ

- (1) ハモグリバエ類
発生程度 : 多
予報の根拠

3月上旬の調査の結果、寄生葉率は10.0%(前年0%、平年0.7%)と平年より高かった。



<防除上注意すべき事項>

- 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。
- 発生源となる圃場内外の雑草を除去する。
- 摘葉等による残渣は本種の発生源となるので、ビニール袋等に入れ圃場外に持ち出し処分する。

- うどんこ病の防除対策

- 3月中旬の調査の結果、発病葉率は3%(前年0%、平年1.3%)と平年よりやや高かったが、発生は一部圃場に限られた。
- 老葉や病葉は発生源となるので、圃場内に放置せず、ビニール袋に入れるなどして持ち出し処分し、透光通風を良くする。